

皆様、こんにちは。

マービン・ナウエンドーフと申します。現在、ドイツのミュンスター応用科学大学の学生です。

初めに、日本の都市部にまつわるちょっとしたエピソードを紹介したいと思います。

大阪駅やその周辺の梅田は、地下通路、階段、エスカレーター、標識、入り口や出口の複雑な構造で知られています。

毎日このえきを利用する方でも、しばしば迷うほどです。

それでは、もし盲目で標識が読めない場合、またはくるま椅子で階段を使わないルートを描かなければならない場合はどうでしょうか。

本日のテーマで、アクセシビリティについて話をしたいと思います。

日本に行く前の私の人生において、アクセシビリティに関する問題にはほとんど直面したことがありませんでした。

2022年から2023年まで大阪に住み、重度障害者のための日中活動センターでボランティアとして働きました。

車椅子を使用する方々、音声タブレットや文字リストなどの代替方法でコミュニケーションを取る方々、日常的なタスクで支援が必要な方々と働くことで、アクセシビリティの問題に触れることになりました。

重度訪問介護従業者になるための講座を受講していく中で、車椅子を操作するという一見私達には単純な作業にも特定の知識と訓練が必要であることに気づきました。

日本とドイツでの私の経験から、障害に対する社かいた的偏見がアクセシビリティへの取り組みに大きな影響を与えていることが分かりました。

両国とも、障害者をまるで幼児のように扱うか過度に同情する傾向があり、彼らの身体的または精神的な挑戦により形成されるアイデンティティを軽視しています。

これはただ単に彼らの能力を低く見積もるだけではなく、社会的包摂への表面的なアプローチをしているに過ぎないのです。

障害者のための社会的包摂とは、障害を持つ方々が教育、雇用、娯楽の機会や、情報、インフラ等の資源、環境へのアクセスを障害のない人と同等に確保できることを指します。

しかしながら現在、障害者と関わる方々に対する評価にはパラドックスがあります。

私が手話を学んでいる、または、車椅子を使用する友達を介助していると話すと、たくさんの方々が私が親切で良い人だと褒めてくれます。

賞賛することは重要ですが、時に世間の理解と評価の欠如が露わになり、人々の平等を促進するのではなく、身体的、精神的格差を強調してしまいます。

アクセシビリティについて探求する中で、点字ブロックによって視覚障害者の移動を助けるという日本の都市部の革新的なアプローチを目の当たりにしました。

これらの補助はドイツではあまり一般的ではなく、主に空港や駅などの特定のエリアに限定されています。

さらに、日本の駅での音声支援、たとえばトイレや出口への案内をするスピーカーの普及も印象的です。

しかしながら、車椅子を使用する人々や移動に問題のある人々にとって大きな障壁となる、公共スペースのエレベーターやスロープのふそくという課題に、両国とも直面しています。障害者が直面するアクセシビリティの障壁は物理的なものにとどまらず、言語とコミュニケーションにも及びます。

学習障害のある人にとってひらがな、カタカナ、漢字を混ぜる日本語のスタイルはとてもむずかしいものです。

一方で、日本手話はドイツ手話より学びやすいと思います。実際に講座やサークルが豊富にあります。

日本が特に優れている分野の一つは、メディアと情報のアクセシビリティです。

日本にいる間、日本のYouTubeビデオにはしばしば大きい字幕が付いていることに気づきました。

これはドイツではあまり一般的ではありません。

この字幕への取り組みは、単なる利便性を超えており、聴覚障害者や難聴者が幅広い情報とエンターテインメントにアクセスできるようにするための重要な包摂ツールとして機能しています。

日本での経験は、包摂的な社会をつくることの困難さと必要性を私に教えてくれました。

アクセシビリティを後回しにするのではなく、社会の基本的な側面として、より包摂的な世界を提唱するよう皆様の協力をお願いします。

ご清聴ありがとうございました。